



Title	『勸学院物語』と天台談義所
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	詞林. 1996, 20, p. 24-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67388
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『勸学院物語』と天台談義所

箕浦 尚美

はじめに

「勸学院の雀は蒙求を囀る」は、「門前の小僧習わぬ経を讀む」と同じく、常に見聞きしていると、それを自然に覚えることを言う。これは、平安時代、藤原氏の大学別曹であった勸学院で、学生が蒙求の「楊寶黄雀」「淵客泣珠」「王祥守柰」のような四字句の標題を漢音で音読していたのが、傍聴者に鳥の声のように聞こえたことからできた諺であると言われ、「宝物集」以下、軍記物、謡曲、舞の本などに広く見られる表現である。¹⁾

「勸学院物語」もまさにこの諺をきかせて作られており、子を、烏や蛇、猫に食われそうになった美濃国の「勸学院」の雀が、「蒙求」等から故事を引いて助けるのである。子雀が助かると、話を聞き付けた諸国の鳥達が祝宴を催し、狂歌を詠む。翌日には雀の縁で雀貝などの貝類を集め、同じく狂歌を詠出させる。そして父雀は出家し、極楽往生するという

内容である。

子雀を狙う烏と蛇の宗論やそこに割り込む禅僧気取りの猫とのやりとりなどに故事説話が多く引かれ、啓蒙的側面も見せるため、表面的には異類物のお伽草子に共通する趣向を取り混ぜただけの作品という印象を受けやすく、例えば「日本古典文学大辞典」を見ても「異類物の発心譚・論争物・狂歌合などと通ずるところがある。」という指摘があるにとどまる。しかし、作品の舞台である勸学院が、この物語では具体的に一寺院を指し、それが実は天台宗の談義所であったというところに注目するともっと多くのことが見えてくるように思われる。

尾上寛仲氏によれば、中世天台宗の談義所（談所）は六十一箇所確認でき、美濃国には勸学院（下宮）談所の他、六つの談義所があったという。²⁾「勸学院物語」本文にも「のうけ、しよけの、しゆれんは、か、みに、むかふがごとし。」とあるが、能化（講師）と所化（生徒）から成る説法の場合である談義所は、「法華経直談鈔」などの經典注釈書の成立の場

でもあり、既に諸氏が研究されているように様々な文芸の成立とも深く関わっていたのである。

伝本は、寛文九年江戸杉原版を「室町時代物語大成」三（一九七五年、角川書店）、その後印本を「新編稀書複製会叢書」二（一九八九年、臨川書店）で見ることが出来る。寛文六年ごろの和漢書籍目録などには古板と見られている京都の吉野屋刊行のものがあるが伝存不明である。また外題を「すゞめのさうし」とした鱗形屋の後印本もある。成立時期については、市古貞次氏「中世小説の研究」（一九五五年、東京大学出版会）には「或は近世の作かもしれない」とあるが、談義所との関連からも中世末から近世初期と考えてよいと思われる。本稿では「勸学院物語」の故事説話の典拠とその扱い方について、天台談義所を視野に入れながら検討したい。なお、「勸学院物語」の本文引用は「室町時代物語大成」三による。

一 美濃国平野勸学院

物語の舞台の勸学院は、本文中に「みの、國、ひらの、くわんがくあん」、「てんだいしうのほうもん、あらかじめ、き、おほへ候。」とあることから、現在も岐阜県安八郡神戸町下宮にある勸学院（持法山密嚴寺）という天台宗寺院を指すことがわかる。「神戸町史」（一九六九年）所引の「勸学

院由緒覚」（江戸中期）によれば、弘仁八年最澄の開基と伝えられ、源頼朝が建立した七堂伽藍等は関ヶ原の合戦で破却されたものの、「勸学院七堂伽藍の節は、末寺も三十ヶ寺程も御座候、諸方より所化付申候、所化寮の跡を、于今、所化屋敷と申候て御座候、此時より勸学院は、海道の法談処に罷成候」とあるように、中世には「海道の法談処」、すなわち、談義所として栄えていたようである。同寺には来歴を記した江戸前期以前の記録は伝わらないようだが、しばしば談義所相互の交流を指摘される法華経注釈書「轍塵抄」第十冊の奥書にも「濃州勸学院」の語が見られる。また日光輪王寺蔵「直談因縁集」巻七第二十五話には、越前の談義所に日蓮宗の僧侶が乗り込んできて、それを勸学院からやつてきた僧侶が論破するという話を取り上げられており、盛んに活動が行なわれていたことがうかがわれる。

二 談義所での宗論

「勸学院物語」は、談義所での宗論を異類に仮託した物語と考えられる。物語ではまず、烏と蛇が「しろうん」する。烏も蛇も勸学院で共に天台宗を学ぶ身で宗派が同じため、後から登場する禅宗の猫との議論とは違って、一般に言う宗論にはならないのだが、各々が如何に神仏と関係が深いかを述べて優劣を競うことになる。

まず、鳥は地蔵の変化であること、熊野の神使であることなどを述べる。鳥と地蔵の関係については、沢井耐三氏「『鴉鷲合戦物語』表現考―悪鳥編―」（『国語と国文学』五十九―七、一九八二年）に記されているように、「法華経鷲林拾葉鈔」や「守武千句」などにも見られる。「勸学院物語」の引用説話と天台の談義所の関わりは後述するが、「法華経鷲林拾葉鈔」にあることから、これも談義所では特に親しまれていた話であると思われる。

一方、蛇は竹生島や巖島との関わりや、龍猛（龍樹）が南天竺の鉄塔をうち開いて秘経を看説したことにより真言が世に流布したこと等を述べている。前者は蛇が弁才天の使いであり、竹生島、巖島、天川がともに弁才天を祀る神社であることによる。また後者は「龍樹菩薩伝」に「其母樹下生之。因字阿周陀那。阿周陀那樹名也。以龍成其道。故以龍配字。号曰龍樹也」とあるように、龍樹の名前が龍に由来することによる。これを蛇が自慢するのは「そもくへびと申は、すなはち、ひやくりうわうなり。」と考えているからである。このように鳥と蛇はそれぞれに自己の優位を主張する。しかし、日頃一生懸命学んでいる筈の仏の教えの解釈となると全くでたらめになってしまう。

例えば、本堂の破風の板間から落ちた雀の子を蛇と鳥が取り合うが勝負が付かない。そこで、鳥が、
そもくへび、日比。ほうもんをき、ならふ事。かやうのた

めなり。いさや、たがいに、しうろんして。かちたる、かたに、此すゞめの子を、つかん

と、日頃まなこをいららげ、耳をそばだてて法文を聞き習っているのはこのように餌の取合になった時などのためだといふのである。蛇もそのとおりだと言って、宗論を始める。また、蛇と鳥の鬭諍は互いに甲乙がつかなかったため、

しばらくありて。からす申けるは。げにまこと、わすれたり。われ、くわんをんぎやうを、見るに。しゆごやうらく、ぶんさん、二ぶん、一ぶんぶ、しやかむにぶつ、一ぶんぶ、たほうふつたう、ととけり。これすなはち。むしんいほさつ、くわんをんぎやうの、くどく、ほうもん、ちやうもんし。しゆじやうの、あまりに。御くびに、かけさせ給ふところの、ようらくを、二つに、ひききつて。一ぶんをは、しやくそんに、たてまつり。一ぶんをは、たほうぶつたうに、さ、げ給ふ。此ためし、あるがゆへに、たゞいまも、この、すゞめの子を、ふたつに、くひさきて。一ぶんむは、へびのはやとのぜう、のまれよ。一ぶんをは、それがし、くらう次郎とぞ、申ける。

とある。これは「妙法蓮華経」観世音菩薩普門品第二十五の「受其瓔珞。分作二分。一分奉釈迦牟尼佛。一分奉多寶佛塔。無盡意。觀世音菩薩。有如是自在神力。遊於娑婆世界。爾時無盡意菩薩」を引いているのだが、観世音菩薩が無尽意

菩薩から与えられた真珠の首飾りを二つにわけ、一方を釈迦牟尼仏、一方を多宝仏塔に奉った、と経典が説くところを都合よく利用して、それと同じように雀の子を半分に分けて食べようというのである。このように宗論とは言っても、仏教を真面目に解釈した内容ではない。

鳥と蛇はその後親雀に説得され子雀を食べるのをやめる。ところが、そこに猫がやってきて再び子雀が狙われることになる。本当に宗論となるのは、この時であろう。本文中に「宗論」の語は用いられてないが、既に争いをやめた鳥と蛇は雀とともに天台宗を擁護し、禅宗の猫を論破するのである。

ここでは、「ぜんろくに、いはく、せつなも、せつしやう、せずは。ぢごくに入事、矢のごとし、といへり。(「入地獄如箭」【碧巖録】八他)」、「ぼたんくわかすいめうは。心有ふてふといへり。ぼたんのはなの、したにありて。うへには、ねふるかほをして、こゝろのうちには。てふをつかまんと、ねらふ(「牡丹花下睡猫児」【五燈會元】二十他)」などの禅の句や、「なんぢがせんぞも。なんせんぜんじには、一かたなには、うちきられたれ。(「南泉斬猫」【碧巖録】六十三他)」といった話頭が引かれている。結局猫は、その性質がいやしいために負けてしまう。しかし表向きには猫が負けていても、実は「ぐる猫禪師」の名が示す通り、負けたのは禅僧なのである。猫は、例えばこう言われている。

なんぢが、すがたをみるに、かみをそれども。ほんなふのねをきらず。ころもを、すみにそむといへども。心を大ぜうにそめず。手には、じゆずを。くるみやうくと、つまぐりて、しゆしやうふりは、すれども。心の中には、物をほしがり、つめを、がさりくと、ときたつる。

頭部の毛の短い猫の姿や爪を研ぐ性質を言い当ててはいるが、煩惱の根を切らず、心を大乘に染めず、ともある。ぐる猫禪師は理屈を並べ立てて自己の優位を説くのだが、このような口達者な禅僧に対する批評とも取れるのである。先にあげた「直談因縁集」も談義所に乗り込んだ日蓮宗の僧侶を論破する話であったが、それと同じように他宗派の談義所への乗り込みを扱ったものだと解釈できるのである。

以上のように、宗論の語は鳥と蛇の場合にしか用いられておらず、内容も仏教を真面目に解釈したものではないが、本物語は天台宗と禅宗との宗論を扱っていると考えられる。実際に談義所に禅僧が乗り込んでくることもあったのかもしれない。

三 「勸学院物語」の蒙求

本節と次節では引用された話について検討する。出典を辿ってみると天台の談義所と関わりを持つと思われる部分が

幾つかあり、物語の成立の場を予想させるためである。まず、「勸学院の雀は蒙求を囀る」の諺との関係から、「蒙求にいわく」として引かれる挿話を検討する。

本文中には「楊寶黃雀」「淵客泣珠」「王祥守奈」の三つが引用されるが、結論を先に言えば、いずれも現存「蒙求」に一致しない。四字句の標題に注が施された「蒙求」は、初期の姿を残しているとされる「古注本」と、「蒙求抄」などが依った「徐注本」（補注蒙求）に大別され、その両方に接触した跡の見られる「準古注本」も幾つかある。現存する代表的な「蒙求」諸本は、「蒙求古註集成」（池田利夫氏、一九八八、八九、九〇年、汲古書院）に影印刊行されているのである。これによって比較した。

「勸学院物語」には「楊寶黃雀」が次のように書かれている。

われ、もうぎうをみるに。ごかん^①の世に。やうほうと、いひしもの。九さい^②のとき。くは^③あんさんにいたるにすゞめの子。かさをわづらひ。ありにささるゝをみて。ふかくあはれみ、とりて、いゑにかへり。はこのうちにきて、わうくわの、しべ^④をとりて、これにかふ百よ日に、かさ、いへければ。あしたにとびさり、ゆふへに、きなる、ころもをきたる、せうじん。きよくくわん、さう^⑤を、もちきたりて。ようほうに、ほうず。いはく、此たまを、つかさとは。しそん^⑥、るいたひに、四世、

三こうたらん。われはこれ、わうじやくなり。くわらんさんにをみて。いたつらに、しすべかりしを、きみかしをんに、たすけられたり。むくひを、しやせすは、あるべからず。いぬ、きたつて、客をき、ほへ、うを、たわふれて、人を見てしつむ。てうじうりんかいの、ちくるひなりとも。いかでか、こゝろのなかるべき。

「蒙求」には次のようにある。

後漢楊寶年七歳行^①於華山中^②。見^③一黃雀樹^④瘡^⑤為^⑥二螻蟻所^⑦。槓^⑧。寶見而憐^⑨之。目將掃置^⑩二杈於巾箱中^⑪。探^⑫二黃花藥^⑬而飼^⑭之。經^⑮二十餘日^⑯。瘡愈。旦去暮來。忽一朝變為^⑰二黃衣年少^⑱。持^⑲二玉環^⑳。雙^㉑報^㉒寶曰。好掌^㉓此子孫累世三公。寶生^㉔震。漢明帝為^㉕二太尉^㉖。震生^㉗康。漢和帝為^㉘二太尉^㉙。康生^㉚賜。漢明帝為^㉛二司徒^㉜。賜生^㉝獻。漢靈帝為^㉞二司空^㉟。出^㊱搜神記^㊲。華陰人也。

(国立故宮博物院藏上卷古鈔本(「古注本」))
続齊諧記。楊寶年九歳時至^①二華陰山北^②。見^③一黃雀^④。為^⑤二螻蟻所^⑥。搏墮^⑦於樹下^⑧。為^⑨二螻蟻所^⑩困。寶取^⑪之以歸。置^⑫巾箱中^⑬。唯食^⑭二黃花^⑮。百餘日毛羽成。乃飛去。其夜有^⑯二黃衣童子^⑰。向^⑱實再拜曰。我西王母使者。君仁愛救極。宝感^⑲二成濟^⑳。以^㉑二白環四枚^㉒與^㉓寶。令^㉔三君子孫潔白位登^㉕三三事^㉖。當^㉗如^㉘此環^㉙矣。宝哀平世隱居教授。王莽微^㉚之。遂逃遁。光武高^㉛其節^㉜。公車特徵不^㉝到。子震安帝時為^㉞

大尉一。震子秉桓帝時為「大尉」。秉子賜靈帝時為「太尉」。
賜子震彪獻帝時為「太尉」。魏文帝時復為「太尉」。震至
彪四世太尉德業相繼

(文祿五年刊「徐狀元補注蒙求」(「徐注本」))

「勸学院物語」のこの記述は、①④⑤⑦は「古注本」に、
②③⑥は「徐注本」に一致し、どちらか一方によるとは言え
ない。「準古注本」諸本や「蒙求抄」、「蒙求和歌」等も同
様である。ところが、「三国伝記」巻八第十四に「後漢楊玉
黄雀ヲ飼助事」という説話があり、どうやらこれに似ている
ようなのである。「三国伝記」の話は「古注本」に近いが、
「蒙求」諸本には見られない独自の文辞を多く持つ。②③⑥
の部分は「勸学院物語」と異なり、「三国伝記」が直接の出
典とは言えないようだが、⑧に「子孫累代」、⑨に「我ハ是
黄雀也。於ニ花山の中ニ徒ニ死スベカリシヲ公ノ慈恩ニ助奉
ル。不^レシバ報謝ニ不^レ可^レ有。犬ハ来^テル聞^ク客ヲ吠、魚ハ戯^レテ見
レ人ヲ沈。鳥獸鱗介ノ畜類也トイヘドモ争^カ心^ヲ無^クベキ」と
あって、これは「三国伝記」のみが一致するのである。他に
全く存在しない⑨を持つことから、「三国伝記」のこの説話
はかなり近いところにあつたと考えられる。

次に「涓客泣珠」であるが、「勸学院物語」では次のよう
に書かれている。

前漢の時代に、ある人が南海の辺を通り掛かった時に漁師
につかまつた魚を買い取つて逃がしてやつたところ、次の日

鮫人と名乗る女性がやってきて一月の間に絹千疋を織つて彼
を長者にし、去る時には鮫人が泣いてその涙が珠となつたと
いう話である。

命を助けられた鮫人の報恩譚となつてゐるが、「蒙求」で
は、鮫人(涓客)が人家に寄住し薄絹を売り歩き、去る時泣
くとその涙が珠となつたという話だけで、命を助けられたこ
とは勿論、珠が礼であるとも書かれていない。しかし、珠を
宿泊代と解釈することは自然なことである。例えば、「勸学
院物語」でも引用される「凝如漢女顔施粉 滴似鮫人眼泣
珠」という漢詩の注釈に書陵部本「朗詠抄」は「日数ノ程、
宿ヲ玉ヘル、其恩難報。暫ク此玉ヲ以、其悦ヲ謝スル也トテ
失又」と記している。

しかし命を助けられた恩返しであるとするのは「三国伝
記」巻四第十四「涓客泣珠事」からのようである。そしてそ
の冒頭も「漢言、前漢ノ世ニ、或ル者ノ南海ノ辺ヲ過ケルニ、網
人一ノ鮫魚ヲ漁得テ為^レ殺」とあつて「勸学院物語」と一致す
るのである。

また同じく鮫人の報恩譚である謡曲「合甫」も「勸学院物
語」に影響を与えているかと思われる。次にその一部を引
く。

今は何をか包むべき。われは鮫人といへる魚の精なり。
命をつがれ参らせし。報謝の為に来りたり。我が泣く涙
の露の玉。絶えぬ宝となるべきなり。

「勸学院物語」の同じ部分には、

いまは、なにをか、つ、み井の。いつまで、つちにむも
れ水、いひいてつ、も、きかせなん。さりし、その月、
そのときに。なさけもふかき、みなそのの。ふちにあそ
びし、うをなりしを。あまのたくつな、ひくあみの、め
にか、りたるは、われらなり。

とある。文辞が一致するとは言えないが、他の部分に比べて調子の整った音楽的な文体となつてゐるのは謡曲の影響もあるのではないかと思われる。

「勸学院物語」にはもう一箇所蒙求説話がある。「王祥守柩」である。次のようにある。

われ、もうきうをみるに、むかし、わうしやうとて、お
やかうくのもの、ありしが。そのは、すゞめの、や
きとりを、ねかふ、わうしやう、は、のねがひを、たつ
せんとするに、かなわずときに、わうしやう、からなし
のきに、いだきつき。てんにあふき、なきければ、す、
め、かすく、まくのうちにとび入。そのとき、この
すゞめをとらへ。は、のねがひをみつ、と見へたり。

「三国伝記」にこの話はないが、「蒙求」の該当箇所を示すと、

晋書。王祥字休徵。事_二後母朱氏_一。庭有_二一株丹椽_一。
母令_レ守_レ之。風雨不_レ替。朱病思_二黄雀肉炙食_レ之。令_レ

祥捕_レ之。忽有_二黄雀数十_一飛入_二幕中_一矣

(真福寺寶生院藏下巻古鈔本(古注本))

晋書。王祥字休徵。琅邪臨沂人。性至孝。繼母朱氏不
慈。而祥愈恭謹。父母疾。衣不_レ解帶。湯藥必親嘗。母
嘗欲_二生魚_一。時天寒水凍。祥解_レ衣將_二割_レ氷求_レ之。水
忽自解。雙鯉躍出。母又思_二黄雀炙_一。復有_二黄雀数十_一
飛入_二其幕_一。鄉里驚嘆以爲_二孝感所_レ致。有_二丹柩_一結_レ
實。母命守_レ之。每_二風雨_一輒抱_レ樹而泣。篤孝純志如_レ此
(以下略) (文祿五年刊「徐狀元補注蒙求」(徐注本))

とある。「蒙求」では、「王祥が母の爲に風雨の毎に樹に抱
きつき泣いてからなしの木を守つたこと」と「母が黄雀の炙
を欲した時に黄雀数十羽が幕の中に入つてきたこと」が別の
話として書かれている。一方「勸学院物語」は、雀が身を犠
牲にしたのは王祥の嘆きのためとする。この点のみからすれ
ば、次に引く「百詠和歌」五「雀」に近い。

入幕_二心王祥_一 王祥、まま母朱氏につかふるころさ
し、まことの母の如くに思へり、後母、病に煩ひて、
黄なる雀のあぶり物をねがふに、王祥求むれどもえ
ず、なくなくこれを歎くに、黄雀数十飛びて幕のうち
に入る、王祥これをまま母にあたへて、病たすかりに
けり、

雀いるははその原は秋ふかきこずるぞさそふしるべなり

ける

しかし、樹に抱きついて泣いたとは記されていないので、「勸学院物語」が特に「百詠和歌」に依つたものとは言えない。とはいっても中世には、蒙求の講釈が多く行なわれていただけに「百詠和歌」や「勸学院物語」のような談義があつても不思議ではないと思ふ。

以上のように「勸学院物語」の蒙求説話は、どれも現存の「蒙求」には一致せず、「楊宝黄雀」は「三国伝記」のみに近い内容であること、「瀟客泣珠」も「蒙求」とは異なり「三国伝記」などと同じ報恩譚であること、「王祥守奈」は一巻三十話の十二巻というしつかりした構成の「三国伝記」にも見られない蒙求説話であるが「百詠和歌」に近いことなどが確認された。これらから「勸学院物語」の蒙求説話は「三国伝記」の依拠した話に近いものから取られたと考えられそうである。

ところで、「三国伝記」は、近江を舞台とした説話が多く、叡山関係の記事が詳細であることなどから、選者玄棟は近江に深い関係を持った天台僧であると考えられている。そしてその蒙求説話について、池上洵一氏は次のように言われている。

現存本の注とは一致しない部分が多く、現存しない古注に依つているのか、それとも古注との間にさらになにかが介在しているのか、容易には判断が下し難く、後の場

合であることも十分に考えられるのである。(中略)この時代とくにもてはやされた話種であつて、「抄物」などに見られるような、原典からはやや離れた形での伝承が行なわれていた可能性も考えられる。

「勸学院物語」の「楊宝黄雀」⑨の部分や「瀟客泣珠」の報恩譚も、「原典からはやや離れた形での伝承」にあたると思われる。そして「王祥守奈」も「三国伝記」には取られなかつた説話的な蒙求から取つたかと思われる。そして「三国伝記」が天台に関わることからもこの蒙求説話は天台の談義所の近くにあつたように感じられる。

「勸学院物語」でも「新編稀書複製会叢書」二の挿絵第一図を見てみると、勸学院の「ほうゐん(法印)」のもとで「しよけのほうす衆(所化の坊主衆)」が蒙求を学んでいる姿が描かれており、その傍らには「首書蒙求」や「蒙求抄」が積み上げてある。調査した限りでは「三国伝記」の蒙求説話が最も近いように思われるが、諸文芸を生み出した天台の談義所で蒙求も講釈されていたと考えるのは自然なことと思われる。そしてそれが「勸学院物語」の蒙求説話のもととなつたのではないかと思う。本物語の挿話が他にも天台に関係の深い書物を利用して思われるからでもある。

四 その他の故事説話の引用

蒙求説話以外の故事説話の引用は何によるものだろうか。

「勸学院物語」が談義所の宗論を扱ったものであることは先に述べたが、作品制作のために利用された資料も、その幾つかは天台の談義の場に近いものだったように思われる。

本物語には次の三つの和歌が引用されている。

我たのむ、七のやしろの、ゆふたすき、かけても六の、
みちにかへすな

心さへ、誠の道に、かなひなは、いのらずとても、神や

まもらん

つみのある、身とむまれぬる、うれしさよ、扱こそたのめ、みだのちかひを

一首目は日吉神社に関して詠まれた慈円の歌で「新古今和歌集」(巻一九・神祇・一九〇二)他にある。有名な和歌で、天台の話に引用するのは当然であると思われる。

二首目は「法華経直談鈔」七末24オに、「或古歌ニ心タニ真ノ道ニ叶ナハ不レトモ 祈神ヤ守ラン」とある。「古歌」とはあるが、「新編国歌大観」には見られない。しかし「法華経直談鈔」にあることから、談義の場ではよく知られたものだったのだろう。

三首目は「いづみしきぶが哥に」としてあげられている。

これも「新編国歌大観」には見られないが、直談系の法華経注釈書である「一乗拾玉集」には和泉式部が詠んだとされる歌が多く収められており、この歌もそういった類のものに収

められている可能性もあり、三首とも天台の談義の場に近い所にあつたと思われる。

また、蛇と鳥が争つてるところにやつてきた猫は、
てんだいの、まかしくわんの、第一にいわく、きつふう
相はさむ、我そのついでにのつとる、といへり

と言つて「鵜蚌の争い」の故事を引く。これは本文中に説明があるとおりに、「漁夫の利」と同じく、第三者が利益を受ける意であるが、わざわざ「摩訶止観」を引用しているのである。実際は巻一にこの言葉はなく、巻五上に「敵強力弱鵜蚌相扼。既不得進又不可退」とある。ここには「われそのついでに」以下の句がないが、「妙法蓮華経」如来寿命品第十六の注釈にはしばしばこの言葉が用いられており、親しみ深い句であつたと思われる。例えば「法華経直談鈔」巻八本には、「鵜蚌相扼我乗ニ其弊ニ云」とある。ただし、「太平記」三十五「南方蜂起ノ事付崑山関東下向ノ事」にもみられるもので、「鵜蚌相挾則 鳥乗ニ其弊ニ」(日本古典文学大系)とある。大系の頭注には相承院本に「鵜蚌相挾テ我乗ニ其弊ニ」とあることが示されており諸本間に異同があるようであるが、「太平記抄」三十五にも如来寿命品を説いた「法華文句」九の句であることが示されており、ある程度一般的に用いられたのだろうが、天台に縁の深い言葉であるのも確かなようである。

また、雀は子が助かつて、

たうのはんれいも。あつくにをおさめ。こうなり、なと
けて、身しりぞくは。てんのみちと、こゝろへて。こく
(カ)のあんたうを、たのしむと、みえたり。

といつて出家する。これは「史記」越王句踐世家に「范蠡以
為大名之下、難以久居」、また「史記」貨殖列伝に「乃乘扁
舟浮於江湖、變名易姓、適齊為鴟夷子皮、之陶為朱公」、
「老子」に「功成名遂身退天之道」と見られる。その他「太
平記」四、「曾我物語」五、「和漢朗詠集」雲「陶朱辭越之
暮、眼混五湖之烟」、述懐「范蠡責負勾踐、乘扁舟於五
湖」、「胡曾詩抄」五湖、「蒙求」范蠡泛湖、「三国伝記」
卷六第十一「呉越戰事」などに見られるが、これらのうち、
もつとも近いのは次にあげるように「胡曾詩抄」のようであ
る。

功成名遂身退八天之道也ト心得テ、大名之下ニハ不可久
居、大功之後ハ速ニ可退思テ、勾踐ニ暇ヲ乞テ、乗舟、
泛五湖、樂風煙ニ也。

とあり、①⑤の要素がすべて含まれているのである。「胡
曾詩抄」は、「和漢朗詠集和談鈔」や「三国伝記」震旦部説
話の有力な典拠であると考えられており、これもまたそれら
と「勸学院物語」との近さを感じさせる。

以上のことから、本物語に取りられた故事説話の多くは天台
の談義所に近い位置にあつた話であらうと思われる。

おわりに

本稿では、天台の談義所を舞台とした「勸学院物語」が、
その故事説話を天台の談義所周辺から収集しているのではな
いかということ考察した。異類を扱った作品で、經典を教
義に反するような扱い方をしている部分もあり、直ちに談義
所内部で作られたものとは言えないであらうが、その談義所
を風刺した作品であるとは考えられる。実際の談義所がどの
ようなものであつたのかは諸氏の研究により徐々に明らかに
なりつつあるが、まだ不明な点も多い。本物語は異類物とい
う性格上、実際とは異なる点も多いであらうが、中世の諸文
芸を生み出した談義所を知る手掛かりにはなりそうである。
そして更に談義所の研究が進めば本物語の風刺的な性格も明
らかになると思われる。

注

- (1) 太田晶二郎氏「勸学院の雀はなぜ蒙求を轉つたか」(「太
田晶二郎著作集」一、一九九一年、吉川弘文館)が参考に
なる。
- (2) 尾上寛仲氏「信濃の天台宗談義所」(「信濃」十二—十
二、一九六〇年)、同氏「関東の天台宗談義所(中)——仙
波談義所を中心として」(「金沢文庫研究」十六—四、
一九七〇年)尾上氏の調査については廣田哲通氏「中世法
華経注釈書の研究」(一九九三年、笠間書院)第一章第一
節にまとめている。
- (3) 尾上寛仲氏「談義所と天台教学の流転」(「叡山学报」

